

44

2016. SPRING



学報

挑戦。スポーツが時代を動かす

NITTAIDAI

創立125周年を迎える今、体育・スポーツの未来を考える。
組立体操の問題から、子どものからだ・教育を検証する。





日体大の これまでとこれから

▷創立125周年を迎える今年、これを期に、私たちは守るべきこと、変革していくべきことを、あらためて考えていく必要があるだろう。社会の変化が急速に進み、体育・スポーツや教育に対する課題や要請も多様化している。組立体操の問題から私たちもさまざまなことを学び、現場で活かしていかなければならない。また、保健医療学部やNASS（日体大アスリートサポートシステム）などの展開は、今後ますます期待が高まっていくはずだ。

▷一方で、これらの取り組みの土台にあるのは、不断のチャレンジ精神、人々の絆、人としてのあり方など、本学が長きにわたり代々の先輩によって継承してきた伝統である。

▷4月、キャンパスに新しい仲間を迎えた。目標達成に向けて充実した大学生活を過ごすとともに、本学で学ぶことの誇りをぜひとも大切にしていってほしいと思う。

学報NITTAIDAI（ニツタイダイ）44号

発行日●2016年4月3日

発行●日本体育大学広報委員会

TEL 03-5706-0948

FAX 03-5706-0922

http://www.nittai.ac.jp/

制作協力●（株）図書出版

Special Contents

03 組立体操の問題から子どものからだ・教育を考える

学校の体育を 組み立て直そう

◎武藤芳照先生×荒木達雄先生メッセージ

◎組立体操・子どものからだについて
もっと詳しくアプローチしよう!

07 活躍するOB・OG

学生野球、社会人野球での輝かしい戦績に、近道はない。
選手として、人としてあたりまえのことを一步一步着実にやっていく。

竹間 容祐氏 日本生命保険相互会社 野球部 コーチ

ハートに響く仕事がしたい。誰もが自分にしかない魅力を持っている。
それをさらに輝かせるヒントや生き方をエネルギーに伝えていく。

川村 綾氏 オフィス北野 フリーアナウンサー プラスプランナー

11 保健医療学部からのメッセージ

～スポーツ・いのちを支える現場で活躍する～

『柔道整復師も 国際大会をサポートできる?』

保健医療学部 整復医療学科 樋口毅史講師

13 NASSの挑戦

アスリートの体力・技術の向上、 効果的な戦術・展開を支える パフォーマンス分析サポート

15 平成28年度事業計画の基本方針について

17 日体大のいまを知る!

平成27年度 日本学生選手権以上の大会で優秀な成績を収めた大会成績一覧

18 news&topics

●平成28年度 役職者一覧

●事務組織の改編

●平成28年度学年暦

●平成27年度退職者紹介



日高藤吉郎像



日高藤吉郎頌

Nittai Story

日高藤吉郎先生

私学には当然のことながら創設者と建学の精神がある。学校法人日本体育大学は、明治24年(1891)8月11日、日高藤吉郎先生により、「体育会」の名称をもって東京市牛込区に創立されたのが始まりである。この年から数えて、今年は125年目にあたる。

体育会の創立にあたり、日高先生は私財を投じたとされている。体育の必要性が十分に国民に浸透してない時代において、並々ならぬ情熱と使命感で困難な事業を成し遂げた。

日高先生は、安政4年(1857)、現在の栃木県佐野市に生まれる。若くして軍人を志し、下士官として西南戦争に参加した。

当時の国内情勢は、明治維新による近代国家体制への移行期にあたり、諸制度の整備と国力の充実に全力が傾注されていた。教育の分野においても、学制の頒布、教育令の制定、学校令の発布等により義務教育が普及し、知育・徳育・体育を3本柱に掲げていたが、体育は指導者の不足等によって知育・徳育に比して停滞する傾向にあった。このような状況下、日本の近代化から取り残されていた課題である体育に着目し、「国民体育の振興」を目標に掲げて設立されたのが「体育会」である。体育会は、翌明治25年(1892)6月「日本体育会」と改称された。

本学の建学の精神である「體育富強之基」は日高先生の志であり座右の銘である。体育は軍人に必要なだけでなく、全国民が強健な体力を保持しなければ国家の発展は望めないとの信念を持つに至り、私財を投じて体育会を創設した。「体育者富強之基」の揮毫を友人である勝海舟に依頼したことからもその思いの強さが窺える。

昭和7年(1932年)76歳で没。日高先生の理想は、今日発展を遂げた日体ファミリーのすべての人々に受け継がれている。

組立体操の問題から
子どものからだ・教育を考える

学校の体育を 組み立て直そう

「体育教師になりたい」という希望をもって日体大に入学した学生も多いだろう。スポーツの楽しさ、仲間と協力する素晴らしさを伝えたいと熱い思いを抱いているに違いない。

いま、学校教育、学校体育の現場でさまざまな問題が起こっている。単に競技を教え、試合に勝たせることだけでなく、子どもたちのために、社会のために、そもそも何を学び、考え、実践していかなければいけないのか。

新学年のスタートの前に、体育教育、体育教師に本質的に求められることをあらためて考え、学習や活動に活かしていってほしい。

小・中・高校での組立体操（いわゆる“組体操”と言われている）による事故が各地で多発し、問題になっています。中には、高さ7メートル、10段にもなるピラミッドが崩れ、複数の生徒が重軽傷を負った例もあり、こうした事態を受けて、全面禁止や高さ規制といった対策を打ち出す地方自治体や教育委員会も見られます。

さて、この問題について、体育教師を目指すみなさんならどのように考えるでしょうか。危ないから禁止するという単純な話で済ませて良いのでしょうか。まず、専門家の先生方の意見を聞いてみましょう。



考えてみよう！



禁止ではなくリスクを減らす努力を

武藤 教師をめざそうという学生で、この組立体操の問題を知らなかったという人がいるならば、それはイエローカードでしょう。子どものからだや体育教育の本質的な問題を内包しているにもかかわらず、**組立体操だけがクローズアップされ、なおかつ、「危ないからやめる」という議論に終始しています。**それでは、現場に即したリアリティのある対応とは思えません。学校体育や体育教員を萎縮させてしまっているのではないかと懸念しています。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックを控え、これから日本の体育・スポーツをもっと発展させていくという機運に水を差すようです。禁止する前に、まずなぜそのような事故が起きているのかを精査し、どのようにリスクと向き合っていけば良いかきちんと考えることが必要でしょう。

荒木 そうですね。我々体育教師の大切な仕事の**一つはさまざまな競技におけるリスクをいかに減らしていくかということです。**リスクをゼロにしようと思つたら何もできません。怪我をしたくなければ、動かなければ良いということになります。それでは、「体育をやめろ」と言っているのと同じようなものです。

武藤 たとえば、かつて水泳プールのスタート台からの飛び込みで死亡事故があった県で、県内の全小・中・高校で飛び込みを禁止した例があります。では、その県の選手がインターハイに出場する時はどうすればいいか。試合の時だけ飛び込むのかと。

荒木 安全な飛び込み方を教えば良いことですよね。

武藤 スポーツにリスクはつきものですし、そもそもいきなり高いところから飛び込むなんてありません。**段階的、個別的な指導が必要なのです。**

この時は我々が働きかけて、5年間かけて県内の全小・中・高校の保健体育の教師に研修を行いました。また、他の自治体でも、同じ水泳の飛び込みで事故が起きたこともあり、日本水連がインシティブをとって指導者・医師・弁護士からなるワーキンググループを立ち上げ、より安全な指導

を行うためのガイドラインをつくった例もあります。

荒木 あらためて申し上げておきたいことは、**本来の組立体操はしっかりと安全管理のもとで行われるものです。**10段のピラミッドなんて、専門家である日体大生でもやりません。まず、**組立体操は何百もの種類があつて、安全なもの、形の美しいものがたくさんあります。**いかに相手を支えて、協力し合うか。そこには、相手のことを思いやる気持ちが必要です。組立体操はいわば安全



荒木達雄先生

体育学部教授。国内のみならず、海外においても体操の普及と指導員の育成に注力。世界各国で体操イベントを企画・演出するなど、イベント開催等による幅広い視点で体操の啓発に努めている。



武藤芳照先生

日体大総合研究所所長、特別招聘教授。医学博士。学校保健の改善から高齢者の転倒予防まで、医療・スポーツ・教育・保健・福祉等の各分野をまたがり、「健やかなからだを育む」をテーマに研究・執筆・講演活動を展開する。

教育そのもののなのです。こうした目的やスタンスを理解していない人たちが行うことが問題です。その結果事故が起これば、危険性だけが一人歩きしてすべての組立体操を禁止してしまうのは、納得がいきませんね。

武藤 このたびの組立体操の事故の背景には、教員や保護者の過度な期待、子どもの基礎的体力・運動能力の低下、学校側の基本的指導方法と安全配慮の修練の不足などさまざまな要因が考えられるでしょう。一般に、重篤な事故が起きた際には

「子ども自身」、「方法(技術)」、「環境(施設・設備、構造物、服装、天候など)」、「指導・管理」のいずれの要因なのかを分けて分析します。その上で過去の同様の事故例についても調べて比較し、共通的な問題とその事故に特異な問題を検討し、以降のリスク軽減に活かしていくのです。繰り返しますが、**分析・検証のプロセスなしに、事故があつた競技を禁止してしまうというのは乱暴な話だと言わざるを得ません。**

児童・生徒をよく知ること

荒木 少し組立体操について話しますと、明治期に輸入された体操の中にその起源を見ることができま。それを日体大の大先輩たちが取り入れて披露することによって、全国に広まってきました。昭和6年頃の写真も残されています。

武藤 昔は軍人の体育修練のような意味合いもありましたね。

荒木 要は鍛えている集団であればきれいで安全にできるわけで、どこまでやっていたのか、きちんと理解がなされていた。安全第一ということ

は、これまで一貫してきたのです。しかし、いまの小学生は体力も持久力も低下しているにも関わらず、安全に対する意識は薄れているような気がします。ある程度のトレーニングが必要なのに、いきなりみんなやりなさいというのは無茶な話です。

武藤 この数十年の間に子どもの身長は伸びましたが、**体を支える力やバランス能力など、組立体操に見合った体力や運動能力は衰えてしまっています。**外遊びがない。スマートフォンやゲームをい

じるだけで、ドアは自動ドア、上り下りはエレベーターやエスカレーター、からだを使わない生活があたりまえになっています。こうした中で、小学校の低学年に発達しておくことが期待されるレベルまでからだの能力が至っていないことになりました。

そこに組立体操というきわめて高度で複雑な素材を与えるわけです。しかも、小学校の教員の中できちんと指導できる教員がなくなってきた気がします。子どものからだを把握したり評価したりする能力も不十分なまま、運動会では見栄え

ばかりを意識して組立体操をやりたいと。それではピラミッドは崩れるに決まっています。

荒木 いまは春の運動会も多くなっていますから、学年が上がって数週間の練習で組立体操をやることとがあると聞いています。専門家の立場から言えば、**組立体操をやりたいのであれば、前学年のうちから基礎的な体力や筋力をトレーニングしてから組立に移っていくのが本当です。**それが、教育ということですし、同時に安全管理になります。

武藤 つまり、組立体操について、子どもについてよく知っていないとできない。

荒木 そうです。**組立体操は造形美ですから、決して段の高さを競うものではありません。**きちんとつければ3段でもとても美しいものになります。縦よりむしろ横の広がりが見え所にもなります。高さで言えば2段だって危険なことがあります。何段までなら大丈夫という議論がそもそもナンセンスなんです。

武藤 いまの学校現場は基準を求めたがるんですね。何段だったら良いんですかと。その範囲なら責任を問われないと誤解している節もあります。荒木先生もおっしゃったように、2段でも3段でも未熟な子どもたちと指導者がやったら危ないものは危ない。リスクが高い。教育は単純に基準に従つてマルかバツで判断できるものではないのです。ゼロかイチかのデジタルの判断は馴染まないですよ。

荒木 非常にアナログの世界ですね。一人ひとりの子どもたち、教師によって特徴もやり方もすべて違う。ゼロとイチの間にいろいろな要素がいっぱい詰まっているわけです。その文脈や行間を読み取れない教師にはなつてほしくないですね。

武藤 日体大の学生は競技面でも教師としてもプロを目指しているわけです。自分の問題ととらえて、体育教育とはどういうことなのか、教える、人を育てるとはどういうことなのかを考えてみてくださ。

検証1 組立体操と組体操はちがう

「組立体操」と「組体操」は異なる性格を持っている体操としてとらえられています。組体操は動的な運動であるのに対して、組立体操は主に表現的身体活動を目的とした体操です。組立体操はピラミッド・エクササイズやアクロバティック・ジムナスティクスとも呼ばれ、単なる記録の更新や勝敗に一喜一憂するスポーツ的な領域ではなく、仲間とからだを組み合わせ、あるいは積み上げて造形をつくり、美の共同感を味わう体操と言えます。運動会や体育祭などで、主に男子の集団演技として学校現場で行われていますが、正しくは「組立体操」と呼ぶことを理解してください。

一方、組体操とはパートナー・エクササイズとも言われ、基本的に2人以上で行う動的な体操です。お互いに力を貸し合ったり、体重を利用して合ったりして1人では行えない効果を狙った運動と言えます。1人で行う場合と異なり、相手の動きに合わせながら動くことで運動に制限が生じ、それによって運動強度が高まるのです。

組立体操は多人数を一斉に指導する場合が多く、指導に時間がかとてもかかることや、大きな事故や怪我につながるリスクがあることは周知のとおりです。組体操も、自分の都合だけで動けないため、相手に十分配慮して行う必要があります。

検証2 組立体操はどのような効果があるのか

組立体操の特徴は言うまでもなく、多人数が協力し合いながら一つの造形をつくり上げていくことにあります。繰り返しますが、記録や勝ち負け、ましてや高さを競うものではありません。そして、出来上がった形の美しさはもちろんですが、その過程もとても大きな意味を持ちます。最初はなかなか上手いかわずに失敗を重ねますが、お互いに相談しながら徐々に動き方を覚えて完成させていくのです。そこでは、忍耐力や協調性・共同性などの精神が養われます。仲間と協力して成功した時の達成感は格別なものになるでしょう。もちろん、トレーニングや練習の過程で、体力・筋力等が鍛えられていきます。

このように考えると、組立体操は運動会や体育祭で演技するだけの運動種目としてとらえてしまうと、効果が半減してしまいます。ふだんの授業で試行錯誤しながら十分時間をかけて取り組んだ上で、その集大成・発表の場として運動会や体育祭で披露するというのが本来のあり方でしょう。体力や運動能力の低下もそうですが、他人とコミュニケーションがとれない子どもや、自分に自信が持てない子どもが増えています。子どもの生きる力や考える力を養う点においてまさに高い教育効果を発揮する種目ではないでしょうか。

子どものからだについて アプローチしよう！

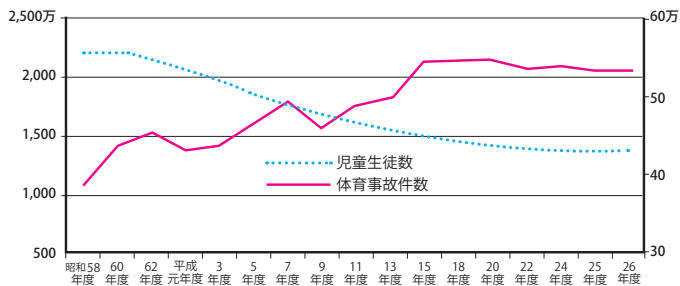


検証3 組立体操にはどのような種目があるか

組立体操は、ピラミッドをつくるだけではありません。造形美を目指すもので、高さだけでなく、横の広がりでも美しさを表現する種目もあります。体操部の学生に披露してもらいました。



体育事故件数及び児童生徒数の推移(昭和58年度～平成26年度)



年度	体育事故件数	児童生徒数
昭和58年度	386,820	21,910,244
昭和60年度	436,850	22,033,119
昭和62年度	450,826	21,487,603
平成元年度	432,564	20,771,771
平成3年度	439,989	19,768,377
平成5年度	467,925	18,625,164
平成7年度	493,174	17,687,664
平成9年度	455,754	16,752,258
平成11年度	488,710	16,020,485

年度	体育事故件数	児童生徒数
平成13年度	498,911	15,433,927
平成15年度	542,530	14,855,722
平成18年度	545,591	14,361,802
平成20年度	543,875	14,179,272
平成22年度	534,855	14,025,590
平成24年度	540,051	13,788,372
平成25年度	530,761	13,650,456
平成26年度	532,003	13,571,217

※1「体育事故件数」は独立行政法人日本スポーツ振興センター発行「学校の管理下の災害～基本統計～」に掲載の小学校、中学校及び高等学校の「体育(保健・体育)」、「体育的クラブ活動」、「体育的部活動」の負傷件数の計

※2 児童生徒数は災害共済給付制度に加入する小学校、中学校、高等学校の児童生徒数(要保護を除く)

検証4 子どもから見た子どものように変化しているか

グラフが示すように、この30年余りで子どもの数が約3分の2になっているのに、体育事故の件数は約1.4倍になっています。子どもの運動能力や体力の低下をあらわす象徴的なデータと言えます。

いまの子どもは、運動不足のタイプと、幼い頃から特定のスポーツの専門的訓練を受けてきた運動過多のタイプに大別され、二極化現象が進んでいます。いわゆるからだの固い子、「投げる」「走る」「蹴る」「握る」といった能力が劣る子どもがいる一方で、指導者が過度のトレーニングを強いいることでスポーツ障害が生じたり、ブレッシュャーを感じてスポーツすること自体がいやになったりしてしまう子どもも見られます。

子どもが少ない、場所がない、時間がない、などの理由で、外遊びの機会が減っていることが子どものからだや心の健全な発達を妨げているのではないのでしょうか。外遊びには、走ったり投げたりスポーツにおける基本的な技術が含まれています。また、人間関係のつくり方や社会性、協調性、我慢など、生きていく上で必要な力も養われます。そもそも遊びは楽しいですし、自然かつ合理的なものですから、スポーツ障害や心のひずみも起きないでしょう。

子どものからだの本来のありようを取り戻していくことが必要です。

組立体操、もっと詳しく

検証5 組立体操はどのように指導していけばよいか

日体大の組立体操の授業は、段階的に十分に時間をかけて行っています。毎時間1種目ずつ細かい注意点を説明(失敗した時の対処の仕方も含む)しながら、時間をかけて帯状に分けて練習しています。たとえば、総時間数180分をかける場合も、それでも完全に近い到達点に至るには授業外での自主練習が必要になってきます。このように、絶えず安全性を確認しながら行えば、目的は達成されるはずですが。

学校現場では、普段の授業で子どもたちの負担の少ない簡単な種目から練習して、筋力やバランス感覚などを身につけさせるような取り組みがまず必要でしょう。指導上の留意点としては、「服装に気をつけさせる」「準備運動をしっかりさせる」「簡単な造形から始め、低い造形から高い造形へと発展させる」「2人組から徐々に多人数を組ませる」「マイクや笛などを効果的に使用する」「安全性を優先させて、集中力が低下しないように常に注意を促す」などの点が挙げられます。

運動会や体育祭で発表するのであれば、隊形変化や、音楽で効果を盛り上げたりして、高さや高度な技術を目的とせず、時間をかけて子どもたちも楽しんで積極的に取り組めるような方法が望ましいでしょう。

まとめ 教師・指導者をめざす日体生へ

組立体操の問題を題材に、体育教育や体育教師のあり方、学校の現場の物事の考え方、子どもの特性の把握の仕方などを探ってきました。私たちはこれから大切なことを学ぶことができます。

○体育・スポーツの本質を理解する

スポーツ(Sport)とは、本来「他に心を移して楽しむこと」という意味があり、気晴らし、楽しさ、遊び、面白さといった要素が基本になります。スポーツを行う人、学校で言えば、教員や保護者の都合ではなく、「子ども」が中心であることを忘れてはいけません。

○自分の頭で考える

危ないから止める、基準が決まったからそれがすべてという考え方は、思考停止の状態でしょう。からだの問題も含めて、指導している子どもたちがどのような状態なのか、それに合わせてどのような指導や配慮をしていけば良いか、など個別の問題に落とし込んで、自分の頭で考えて解決策を導いていくことが求められます。

○学び続ける

社会の情勢、スポーツを取り巻く環境は刻々と変化しています。視野を広げ、さまざまな問題に関心を持つことが大切です。また、指導する競技・種目の一つひとつに目的や特徴がありますから、絶え間なく学び続けていくことが不可欠になります。

次代を担う逞しい子どもたちを育てることは急務。みなさんに期待が集まっています。



学生野球、社会人野球での輝かしい戦績に、近道はない。 選手として、人としてあたりまえのことを一歩一歩着実にやっていく。

日体大進学を強く勧めたという恩師。日体大で苦楽を共にし、野球界で活躍する仲間たち。日本生命で出会った人々。そして育て上げたプロ選手たち。スポーツ界の卒業生の方々取材すると、人としての魅力と日体大のつながりの素晴らしさをあらためて実感する。凛々しいユニフォーム姿。笑顔。その一瞬には、それまでの困難、思い、人への愛情のすべてが凝縮されている。決して取材時だけではない、生き様そのものから現れた勇姿だ。とりわけ、竹間さんのお話には、野球にかけるストイックなまでの情熱を強く感じた。

最後は気力・執念が勝つ

野球が好き。ずっと続けたい。高校時代の恩師である日体大OB・大野道夫監督(当時)に「お前は日体大に行け」と言われた時、迷わず従いました。大野先生は1971年春のリーグ戦2回戦で、1試合3本塁打11打点の新記録を樹立した方。先生の人間性に深く心酔していた私は、その言葉に間違いないと確信していましたし、事実、後に日体大、日本生命で晴れ舞台に立たせていただくことができたのも、先生の導きのおかげだと思っています。

日体大野球部は「とんでもないところに来たな」と驚いたほど厳しい環境でした。部員数は約400人。この中でどうやって自分をアピールしていくか。私が心がけたのはとにかく声を出すこと。元気の良い選手は、必ず周りの目に留まります。さらに、私を支えてくれたのは、大野先生の「気力・執念に勝るものなし」という教えです。技術はもちろん大事だけれど、最後の最後は「勝ちたい」「優勝したい」という思いが強い者が勝つ。この信念を持ち続けることで、自分にとってもチームにとっても良い結果を残すことができたと思っています。お世話になった上平(雅史)先生にも心から感謝しています。



活躍する OB

日本生命保険相互会社
野球部 コーチ

竹間 容祐氏
INTERVIEW

4年生(1993年)の秋には、チーム史上初となるリーグ戦10連勝で完全優勝。この時、私はキャプテンを務めていました。当然のことながら、一人の力だけではチームをまとめることはできません。このことは、小学校・中学校・高校・大学・社会人を通してキャプテンを務めさせていたのだに実感しています。みんなを巻き込んで一緒にやっていくという気持ちをもつと伝えているように心がけていました。頑張っている背中を見せてチームの気持ちを動かすというより、ミーティングをよく開き、みんなに声をかけ、これをやろう、あれをやろうとコミュニケーションをとっていくタイプです。私自身は頑張っていると言われるほどのことはしていません(笑)。当時も、副キャプテン、女子マネージャー、グラウンドマネージャー、学生コーチ、それから同級生や下級生が、私を支えてくれているのをひしひしと感じていました。確かに、下級生に対して厳しく接した面もあります。しかし、その時に一緒にやっていたメンバーは今でも大切な仲間になっていますし、卒業して20年ほどがたった今では、当時のことを酒を飲みながら笑って語り合える関係が続いています。

社会人野球の厳しさ 野球を深く考えるきっかけ

大学野球と社会人野球の違いは、言うまでもなくプレーをしてサラーリを得ていることだと思えます。学費を払って自分のために野球をやっている学生野球とは、厳しさが全然違うのです。日本生命には間違いなく野球が認められて入ったわけですから、野球で会社に貢献しなければいけません。それができなくなったら、ユニフォームを脱ぐしかないのです。そこには、試合に出るための激しいポジション争いがあります。ライバルに負けるわけにはいかない。子どもの頃から続けてきた好きな野球を続けるためには、一瞬たりとも気を抜かず技術や心身を鍛え続けなければいけないのです。そういう自覚や責任感がないと、あつという間にドロップアウトして、2、3年の短い期間で選手生命を終えなければいけないことになります。一年でも長くプレーしたい、日本一になりたいという思いで練習に励む日々の中で、社会人になって野球についてさらに深く考えるようになりました。

2002年に全国社会人野球ベストナインに選ばれ、同年日本選手権優勝。ありがたいことに、日体大時代同様、この時もキャプテンを務めていました。やはり私を支えてきたのは、勝ちたい、野球を続けたいという気力・執念だったと思います。

しかし、私にも現役引退を決断しなければいけない時期が訪れます。社会人10年目のシーズン途中に腰のヘルニアの手術をしました。まだ、4、5年はやりたいという思いで、体にメスを入れたのでした。そして、その翌年のシーズンオフに「コーチをやらないか」と告げられることになります。その時は即座に「嫌です」と答えました。当時、1週間に1回は痛み止めの注射を打ってかなり体が辛い状態でしたが、走りは衰えても打席に立てばまだ負けないという自負もありました。まだ自



竹間 容祐（ちくま ようすけ）／1994年、体育学部卒業。立教（現・立教新座）高校出身。日体大硬式野球部時代には日米大学野球選手権大会オールジャパンメンバー入りを果たす。日本生命野球部では、2002年に全国社会人野球ベストナイン（外野手）に選ばれたほか、優秀選手2回、打撃賞1回受賞。同部は都市対抗野球大会に通算57回目の出場（全国最多）・4回優勝、社会人野球日本選手権大会で3回優勝の実績を誇る。平成27年には、都市対抗・日本選手権の夏秋連覇を達成。コーチ・スカウティングと豊富な選手育成経験を持つ。

分の中で現役としての終わりが見えていなかったのでしょう。続けたい、まだできると気力を振り絞っている一方で、体がきつい、もうだめなのではないかとうすうす感じ始めた不安。その葛藤に終止符を打ってくれたのが、当時幼稚園児だった息子のひと言です。「パパ、腰痛いから、もう無理しないでいいよ」と。息子の記憶に私がプレーをしている姿がもう残っている。ほっとしたというのが率直な気持ちで、11年間の現役生活を終え、コーチの話をお受けしました。

選手である前に、人として

コーチに就任して12年目になります。2015年には、史上3チーム目となる都市対抗・日本選手権の優勝、夏秋連覇を達成しました。コーチに就任して以降プロに送り出した選手は9人になります。

指導で心がけていることは、大野先生の教えや日体大での経験が基礎になっていると言っているかもしれません。日体大では、挨拶をする、返事をしっかりする、話をしている時は相手の目を見ろといった、人としてあたりまえのことを叩き込まれました。今、選手によく話すのは「気配り、目配り、心配り」ということ。とにかく、人として大切なところを口やかましく指導しています。野球は華やかな世界ですが、それにつられて決して驕ってはいけません。技術に対してももちろんですが、野球を離れても人として認められ、周りの人々と良好な関係が築けるようになってほしいと思っています。

皆さんの中にも、監督や指導者を目指す人がいるでしょう。「気配り、目配り、心配り」はそこでも同じです。人の痛みがわかるようになってください。落ち込んでいる選手がいたら、「どうしたんだ」と声をかける。もちろん優しいばかりではなく、

厳しさも大切です。スポーツは結果がすべての世界ですから、どんなに努力してもレギュラーになれないこともあります。でも、その努力をわかってあげられる人であってほしい。私自身もそうありたいと常に努めていますし、将来機会があればチームを率いて、お世話になった方々に恩返しをしたいと思っています。

日体大の卒業生は、スポーツ、教育、ビジネスの世界でたくさん活躍しています。日体大で学んだ人間力をフルに発揮して、卒業生の方々の存在を励みにしながら、「自分も負けないぞ」という思いで、お互いに刺激し合っていけたらと思います。そして、私たちをどんどん超えていってほしいのです。階段は一段ずつ登っていくしかありません。一段飛ばし、二段飛ばしではなく、一段ずつ地道に登っていく。私なりに選手、コーチと野球人生を精一杯歩んで来ましたが、それが成功の近道ではないかとあらためて思います。



ハートに響く仕事がしたい。誰もが自分にしかない魅力を持っている。それをさらに輝かせるヒントや生き方をエネルギーギッシュに伝えていく。

日体生の活躍の舞台はますます広がっている。花形の職業であるアナウンサー、そしてプラスプランナーとして活躍する川村さん。この2つの肩書は、エネルギーギッシュに、そして真摯に、自分と向き合い続けて探し当てた「素顔」だ。本当の自分らしさに気づいて、それを自分の言葉で伝えることによって、必ず人の心を動かす。「もったいない」が口癖。眠っている魅力に気づかないなんて、限られた時間を漠然と過ごしてしまうなんてもったいない。さらに輝くために、一つのことに精一杯打ち込んでほしいと私たちの背中を押す。

大学で頑張ったことを胸を張って
言える社会人になりたかった

「大学時代に何をやっていたの?」と聞かれて、胸を張って答えられる人は、少ないですね。私はそういう大学時代を過ごしたくなかったんです。何か一つでもいいから、目的意識を持って過ごしたい。それが、私はテニスでした。

日体大を選んだのは、まずテニスが強くになれる環境があったこと。体育系の大学をいくつか見学しましたが、その中で学生が一番いきいきしていたのが日体大でした。もちろん運動が大好きでしたし、体の仕組みについて学ぶことにも興味がありました。

テニス部(硬式)は、一年中ほとんど休みがないほど、練習、練習の毎日。朝練の時は、いつも始発で家を出ていました。ですから、今も朝口けは強いんです(笑)。

テニス中心の大学生活でしたが、海浜実習やキャンプ実習、スキー実習などで、ふだんとちがうスポーツを体験できることも楽しめました。授業では、運動生理学や解剖生理学など、テニスが強くなるために学んだことをすぐ部活に活かせる科目が特に好きで、実践的な知識を得ることができま



活躍する OG

オフィス北野
フリーアナウンサー プラスプランナー

川村 綾氏
INTERVIEW

した。

実は、先日、本当に久しぶりに、先輩・後輩も交えてテニス部のメンバーで集まったんです。先輩を前にすると、今でも気持ちが高まるんですね。今の私があるのも、みなさんのおかげだと思っています。

インカレ後にアナウンサーを目指す

アナウンサーは人気の職業。多くの人は早くからスクールに通って、超難関の採用試験を目指します。でも私は、大学4年の夏までインカレを目指して競技に打ち込んでいて、就職活動はまったく意識していませんでした。

卒業を控えて、ものすごく焦って、将来のことを考え始めました。その時、テニスはもうここまでにしようと思いました。これ以上強くなれないと感じたし、テニスだけしか知らない人にはなりたくない。おしゃれだったほしい、プライベートも充実させたい…。

強さや格好の良い生き方にはずっと憧れていました。花形のアナウンサーであれば、理想にピッタリ。テニスの次に夢中になれることを探した時、夢や目標は高いほうが良いと考え、大胆にもアナウン

サーを目指すことにしたのです。

そこで必死に情報を集めました。採用試験が特に早いアナウンサーはその時期では募集は皆無。奇跡的に新聞の求人広告で静岡朝日テレビの募集を見つけて、450人近い応募者の中から選ばれて、12月に内定をいただくことができました。

何も知らないで入りましたから、腹式呼吸から原稿読みまで、一から勉強しました。ローカル局ですから、自分で企画、取材、編集することもふつうです。怒られることもしばしば。でも、局アナ時代に、新人なのに堂々としている、貫禄(っ)があるとよく言われたことがあります。確かに、緊張が表情に現れないタイプだったかもしれない。それもそのはず、日体大で試合の緊張感を数え切れないぐらい味わっていましたから。

プラスプランナーとして、 その人にしかない魅力を引き出す

今、フリーアナウンサーのほかに、「プラスプランナー」として活動しています。食や美容、スポーツやメンタル、話し方など、生活のすべてにおいて、自分に合ったより良いスタイルを見つけていくお手伝いをする仕事です。無から有を生み出すというより、今持っている魅力や持ち味を本人に気付かせもつと磨いていく。そんな意味で「プラス(+)」



言語表現の授業。マニュアル通りではなく、自分の言葉で自信を持って話すことで必ず思いは伝わりとアドバイス。



川村 綾(かわむら あや) / カリタス女子高校出身。日本体育大学女子短期大学(現・女子短期大学部)入学、体育学部3年次編入。中学・高校教諭(保健・体育)免許のほか、社会教育主事、公認スポーツ指導員、健康運動実践指導者などの資格を取得。硬式テニス部ではキャプテンを務める。2001年卒業後、静岡朝日テレビ入社。主に、報道やニュースで活躍。現在、オフィス北野所属。何事にも好奇心旺盛だが、特にこだわりがあるのは「食」。周りの人々を楽しく元気にしたいと、エネルギッシュに活動が続けている。



を演出する、プラスプランナーと名付けました。これは私が作った言葉です。

もともとは、誰もがせっかく良いものを持っているのに活かされていない様子を見て、もったいないと感じたことがきっかけでした。たとえば、医師や弁護士、企業の役員の方々の講演会に講師としてお招きいただくことがあります。知識や経験はもちろん、人柄も素晴らしい方々ばかりなのに、人前で話すのが不得手。まるで、原稿を棒読みしているような喋り方は本当にもったいない。また、大学や短大で学生にお話しさせていただくこともありますが、コミュニケーションが不安なのは就活生も同じです。誰でもこれなら人に負けないということがあるはず。それを見つけて伝えるお手伝いもしています。たった一つで良いですから、自分しか言えないことを見つけて、自分の言葉で伝えることができるようになれば、必ず相手に伝わるプレゼンテーションや面接になるのです。

私自身、以前は別な意味でプラス、プラスと考えていました。勝ちたい、勝たなければ意味がない。自分が、自分かと、とにかく自分が主役。勝ち負けがすべての世界にいましたから、仕方なかったか

もしれません。アナウンサーになつてからも、画面

に映らないところでどれだけ多くの人に支えられているかということに気づく余裕がありませんでした。与えられた仕事をきっちりやっていたら誰も文句は言わないだろう。コミュニケーションなんていないとさえ思ったことがありました。

体も気持ちもかなり無理をしていたのだと思います。正直、仕事が楽しくないと感じることもありました。そして、体調を崩してしまいます。このままではいけない。どうしたら良いだろうと考えた時に、自分が変わらなければいけないという思いに至りました。

これからの仕事では人が喜ぶことをしよう。自分が、自分かという考えをやめよう。格好良くなくともいい。そう思った時、肩の荷がすんと落ちて、すごく楽になりました。そんな私だったのに、つまでも友達でいてくれる日体大の仲間。彼女たちと一緒によりよい時間を過ごしたい。彼女たちに楽しんでほしい。そんな気持ちで、プラスプランナーの活動の原点にあります。

今は小・中・高校の先生方からも良くお仕事の声をかけていただくことがあります。自分で考え

て意見を言えるような力を身につけさせたい。夢を持たない子どもが多いから、社会に出る、大人になる楽しさを伝えてほしい。みんなの気持ちをプラスにする仕事です。今、この仕事を心から楽しいと感じています。

元気に、エネルギッシュに 「今」に打ち込んでほしい

ぜひ機会があれば、日体大の学生に直接お目にかかってお話しさせていただきたいですね。私が言いたいことはシンプル。エネルギッシュでタフであってほしいということです。今、子どもも大学生も優等生タイプが多いように思います。ただ、学校も仕事もがむしゃらにやらないと楽しくないんです。後でやっておけば良かったと後悔するのはもったいない。与えられた時間は限られていますから、今一生懸命やらなかったら、もうチャンスは巡ってこないかもしれません。一生懸命やったのなら失敗しても財産になるのです。

日体生はテレビの世界にすぐ向いていると思います。スポーツという一つのことを一生懸命やってきた経験のある人は、どんな分野でも素直に打ち込むことができるはずです。

いろいろな学生に接していると、本当にみんな無限の可能性を持っていると実感します。人との出会い、たったひとりでスイッチが入って、その後の人生が180度変わることもあります。どんな学生でも、自分らしい夢や希望がきつとあるはずですが、それに気づいていない人が多いだけ。それは、経験値のあるちやうとだけ長く生きている私たちが導いてあげるべきです。テレビを通して、そしてプラスプランナーとして、たくさんの方のハートに響く仕事をこれからも続けていきたいと思っています。



保健医療学部
整復医療学科

樋口毅史 講師
(運動器外傷学研究室)

保健医療学部整復医療学科の取得目標である国家資格「柔道整復師」。
樋口先生は視覚障がい者柔道(ブラインド柔道)に携わり、国際舞台で活躍されています。
接骨院や整骨院だけではなく、柔道整復師の幅広い活躍の実際を紹介しましょう。

柔道整復師というと、接骨院や整骨院を開業したり、そこに勤務して働くというイメージがあるでしょう。しかし、国家資格である柔道整復師の活躍の場は思った以上に広いものです。市民マラソンやママさんバレーなど、身近などんなスポーツにも怪我や故障はつきものです。当然そこでは柔道整復の技術を活かすことができます。最近は大大会の場では医療スタッフが常駐するようになりましたが、小規模の大会ではまだ十分とは言えません。こんな小さな大会や団体に柔道整復師やトレーナーが来てくれるの?といった遠慮もみられます。

私がおもに関わっているのは障がい者スポーツ、中でも視覚障がい者柔道(ブラインド柔道)です。特別支援学校の教員を務める柔道部の後輩との縁でサポートするようになりました。障がい者スポーツでは柔道整復師はまだそれほど目立った活動はしていなかったため、私が活動することで後進に道が開けるのではないかと考えたこともお引き受けした理由でした。



IBSA 2013 U.S.Judo International Championships 樋口先生
(後列右)は日本代表チームコーチ兼トレーナーとして帯同

プロフィール: 樋口毅史(ひぐち たけし)/新潟県出身。体育学部武道学科卒。在学中は柔道部に所属しながら日体柔整専門学校(夜間部)へ通学し、大学と専門学校を同時に卒業。保健体育教員免許(中・高)と柔道整復師資格の両方を取得する。同専門学校講師を経て現職。障がい者スポーツトレーナーの資格を保有。講道館柔道六段。IBSA(国際視覚障害者スポーツ協会)の国際大会に多数帯同。NPO法人日本視覚障害者柔道連盟理事。

国際大会を できる?』

Q 障がい者スポーツとはどのような
枠組みや内容なのでしょう?

障がい者スポーツとは「障がい者のための特別なスポーツ」という意味ではなく、「競技規則や用具を一部変更し改良することで安全に楽しくかつ公平に行うことができるように、障がいの状況に合わせて行っている実態をさす」(障害者スポーツ指導教本より)ととらえることができます。日本の障がい者スポーツには「身体障がい者」「知的障がい者」「精神障がい者」の大きく3つの枠組みに分けられます。このうち、身体障がい者の肢体不自由者が行う車椅子バスケットボール・陸上競技・車椅子テニス・アーチェリーなどや、視覚障がい者が行う陸上競技・柔道・ゴルフボールなどが、特に柔道整復師の活動が期待される領域です。

※「障害」という表記は配慮から「障がい」とされることが多くなっていますが、本文では協会・連盟等の表記に準じて両方を使用します。

Q 障がい者スポーツトレーナー制度
とはどのようなものなのでしょうか?

「障がい者スポーツトレーナー」とは、「障がい者のスポーツ活動に必要な安全管理および競技力の維持・向上の支援をする者」とされています。活動するためには、日本障がい者スポーツ協会(JPSA)が主催する養成講習会を受講し、試験に合格することが必要です。この受講資格は、日体協アスレティック・トレーナー、または、当協会加盟競技団体等で活動している者で、当該加盟競技団体から推薦された医療資格(国家資格)を有する者となっています。この医療資格の中に、理学療法士や作業療法士と並んで、柔道整復師が入っています。また、このほか「障がい者スポーツ指導員」(初級・中級・上級、初級は18歳以上で健康な人であれば受講可能、「障がい者スポーツコーチ」などの資格があります。

Q 柔道整復師は具体的に現場に
どのように携わるのでしょうか?

柔道整復師は、怪我(外傷)の手当と回復施術(リハビリ)を行うことが法的に許されている国家資格です。具体的には脱臼、骨折、打撲、捻挫等に対して、その回復を図る施術を行います。ですから、スポーツ現場での活躍が大きく期待されることは言うまでもありません。この点が、理学療法士や作業療法士、コンディショニングやストレングスコーチなどと異なる特徴と言えます。さらに、障がい者スポーツは、選手がなんらかの障がい(ハンディ)を持っていることから、常に障がいに起因する問題で事故や故障が発生するリスクを抱えています。スポーツドクターや看護師、柔道整復師といった医療資格を持っている人がとりわけ必要とされている現場と言えます。

- ・柔道整復師は障がい者や地域スポーツなど活躍の場が広い
- ・チームに帯同して、国際大会や海外遠征もサポートできる
- ・怪我や故障の手当と回復に携わる専門性の高い医療資格

Q ブラインド柔道とは どのような競技でしょうか？

視覚障がい者柔道（ブラインド柔道）の試合参加資格は、国際的なクラス分け等級によって次のように分かれています。B1（両眼とも光覚なしから光覚まで。どの距離や方向からでも手の形を認知できないもの。いわゆる全盲）、B2（弱視。視力0.03まで。または視野が5度以内）、B3（弱視。視力は0.04から0.1または視野が20度以内）です。ただし、B1、B2、B3の選手は、一緒に試合を行い、区分は体重別で行われます。ルールでは、（1）試合は両者がお互いに組んでから主審が「はじめ」の宣告をする。（2）試合中両者が離れたときは主審が「まで」を宣告し、試合開始位置に帰る。（3）場外規程は基本的に適用しない。但し、故意に利用した場合には、障害の程度に関係なく適用されることがある、などの違いがあります。



お互いが組んでから
試合が始まる

～スポーツ・いのちを支える現場で活躍する～

『柔道整復師も サポート』

保健医療学部整復医療学科をチェック

柔道整復師の育成、国家資格の取得はもちろん、解剖学や生理学といった基礎医学をはじめとする医療全般の知識の習得を目指す。実践的な実習や、海外での活躍を想定して英語力の育成に力を入れていることも特徴。さらに、「日本体育大学スポーツケアセンター横浜・健志台接骨院」が2015年10月にオープン。学生や教職員、地域の方々に価値ある治療を提供するとともに、整復医療学科付属臨床実習施設として教育の核としても展開している。

Q 選手のサポートの点で、 健常者との違いがありますか？

怪我をした時に現場ですぐ対応できるという点が柔道整復師の強みですし、その役割は障がい者スポーツでも同じです。ただもちろん、視覚障がい者であれば、大会会場内の移動、控え室やトイレの誘導といった選手の「目」になるようなサポートも必要な場合があります。海外遠征の際、選手と待ち合わせてチームドクターのオフィスに連れて行ったこともあります。施術に関しては、やはり選手自身は怪我の箇所や状態が見えませんかから、不安を取り除くために、説明は特に詳しく行うようにしています。さらに、これは障がい者スポーツに限らないと思いますが、選手に気を遣わせない、遠慮なく話してもらえようという雰囲気づくりも心がけています。

Q 柔道整復師の資格はどのような 可能性を持っているのでしょうか？

みなさんの中にもトレーナーを目指す人は多いと思いますが、スポーツの現場に携われる仕事はそれだけではありません。むしろ、障がい者や地域のスポーツでは、柔道整復師のほうがかかりつけの接骨院の先生として親しまれているでしょうし、怪我の対処といった実践的なサポートができるでしょう。国家試験を受けるための勉強は大変ですが、可能性はいくらでも広がっています。スポーツと海外に興味がある人にとって、満足度の高い活躍ができるはずです。私も海外大会でトレーナー会議などに出席し、英語をもっと勉強したいと思うようになりました。障がい者スポーツの分野で国際的な発表を行うことが今の夢です。

いまさら聞けないパラリンピックとは

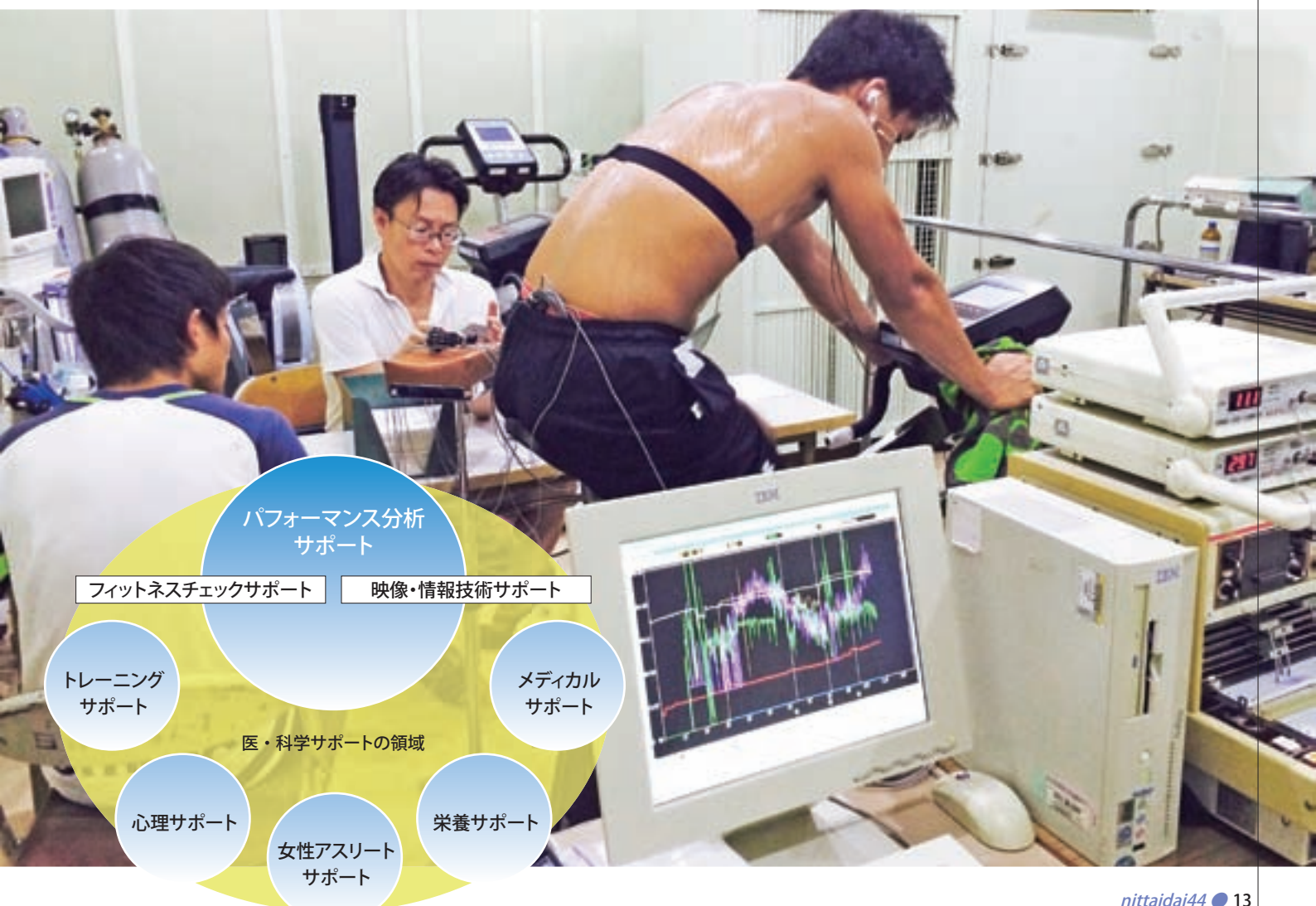
世界最高峰の障がい者スポーツ大会として、オリンピックの同年・同場所で開催される。障がい者スポーツの歴史は古いが、1948年にイギリスのストーク・マンデヒル病院で開催された、戦争で脊髄損傷を負った軍人のリハビリテーションの一環として始まったアーチェリー大会がパラリンピックの起源とされている。パラリンピックは身体障がい者の競技が主体で、このほかデフリンピック（聴覚障がい者）、スペシャルオリンピックス（知的障がい者）がある。

日体大のアスリート育成体制が新時代に入った。「日体大アスリートサポートシステム(NASS)」は、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会において、「70名の学生及び卒業生をオリンピック・パラリンピアンとして輩出」すること、さらに将来にわたり世界をリードするトップアスリートを輩出するため、これまでのオール日体大の実績や知見を体系化し構築されたものだ。競技者はもちろんのこと、サポートスタッフなどを志す全ての学生にも門戸が開かれていることも特徴である。

本連載では、NASSの取り組みの最前線を紹介する。今回取り上げるのは、5つのプログラムから成る「医・科学サポート」の1つ「パフォーマンス分析サポート」だ。「医・科学サポート」とはスポーツ医・科学の分野から競技力の向上を総合的に支援するもので、NASSの中心的事業を担っている。このうち「パフォーマンス分析サポート」とは、アスリートの体力や技術、実際の競技における戦術等に関して評価・把握するために、定量化できる側面からの分析サポートを行うものだ。おおきく、①フィットネスチェックサポート、②映像・情報技術サポートの領域に分かれる。

NASSの挑戦 | 第1回

アスリートの体力・技術の向上、効果的な戦術・展開を支えるパフォーマンス分析サポート



データや画像で 選手・チームの課題が浮き彫りに

「フィットネスチェックサポーター」では、身体能力の現状把握やトレーニング効果の評価、パフォーマンス予測などを目的とした体力測定を実施している。例えばMRI（※核磁気共鳴画像法＝核磁気共鳴現象を利用して体内の内部の情報を画像にする方法）を使って筋量の変化や筋形態の測定などのデータを継続的に収集することやエネルギーの代謝の能力チェック、運動をした時の呼吸分析など、競技に特化した専門的な体力測定を通して、選手の運動能力や体力を分析し、パフォーマンス向上に役立てることが狙いだ。

フィットネスチェックサポーターは、収集されたデータや資料を介した選手と指導者の両方の日々の取り組みの確認といえる。すなわち、選手自身が日々おこなっているトレーニングの方向性の確かさを確認するとともに、指導者も日々考案しているトレーニングの効率・効果を上げることや今後の強化の方向性を定める上で有効な資料として活用されているという。

その一方で、「映像・情報技術サポーター」は、選手個々へ直接的に働きかけることができるパフォーマンス分析と言える。映像・情報技術サポーターは映像分析や動作分析、ゲーム分析を行えるソフトウェアを駆使したパフォーマンス分析のことで、例えばトレーニング中の映像を選手が所有するスマホやタブレットでチェックできるといったように、

即時性の高い映像サポーターを試験的に実施している。

例えば、ハイスピードカメラで撮影したトレーニング中の映像をWiFiを使ってサーバーに配信し、トレーニングを終えた選手がそのサー



バー上で練習中の映像を確認。練習中の動作やパフォーマンスを繰り返し見ること、自身の動きを修正することに活用できる。もちろん、ソフトウェアの利用に不慣れな選手や指導者向けには、ソフトウェアの使用・分析方法に関するセミナーを定期的に開催し、映像を即時でフィードバックできる支援も行っている。

ポセイドン・ジャパンの 五輪出場にも間接的に貢献

こうした映像やソフトウェアを活用したパフォーマンス分析やデータ分析は近年、さまざまな競技でその価値が見い出されている。32年ぶりにオリンピック出場を決めた水球男子日本代表「ポセイドン・ジャパン」は、チームを率いる日体大OBの大本洋嗣ヘッドコーチがソフトウェアを活用したパフォーマンス・データ分析を導入し、戦略や戦術構築に活用。念願のオリンピック出場へ大きく貢献したという。NASSからもソフトウェアの貸し出しを行い、この快挙に間接的に関与した。さらに、バレーボールなど、代表監督がタブレット片手に指揮を執る姿がテレビで映し出されているように、ソフトウェアを活用したデータ分析や競技力向上の波は、もはや主流になっている。

もっとも東欧諸国では1970年代からパフォーマンス分析が行われており、その点ではまだ日本は普及・活用の余地があると言わざるを得ない。日体大はその推進役となるべく、NASSというアスリートサポーターの組織を立ち上げ、国内の大学では初めて専門の教員を配置した。その意味でも、NASSのサポーターは、実効性の高い取り組みが展開されることを期待されている。

さまざまな部活動での活用を期待

では、実際にパフォーマンス分析を導入している日体大での部活動は、どんな競技があるのだろうか

か。カヌー、ライフセービング、自転車競技、女子ラグビー、男子レスリングなど多岐にわたっている中でも、顕著な成果の出た競技の一つが自転車競技だという。

日体大の自転車競技部は、自転車競技に必要な持久力を把握する上で、選手個々の最大酸素摂取量の変化や、乳酸に耐える能力（血中乳酸応答）を定期的に測定・分析してきた。これはパフォーマンス分析の「フィットネスチェックサポーター」に該当するもので、同じ持久力でもどの能力が優れているか、どのように機能しているからパフォーマンスの向上・停滞につながっているのかなど、自転車競技部の指導者は、収集したデータを定量化、数値化することでパフォーマンス向上の確率を高めることにつながると実感してきた。

例えば、3kmタイムトライアルという種目のある選手を具体例に話を進めよう。その選手の高校生から大学4年間の持久力を把握するために、最大酸素摂取量の変化と乳酸に耐える能力を測るデータを定期的に測定。その選手は4年次に学生日本記録を達成するまでに成長した選手だったが、一時期パフォーマンスが停滞した時期があった。

そこでパフォーマンスが停滞した時期の最大酸素摂取量を調べたところ、最大酸素摂取量の数値が上がっている過程は見られたが、その一方で同じ時期の乳酸に耐える能力・数値は下がっていたという。こうしたデータの変化から、身体の中で酸素をうまく循環させる能力は順調に育っていたものの、乳酸に耐える能力は下がっていることが分かった。その選手はパフォーマンスが停滞した時期に、減量をしていて、筋力も落ちていたため、筋量の低下と同時に乳酸に耐える能力も低下していたことがパフォーマンス停滞の原因の一つだった。こうした継続的なデータ測定により、現在その選手に何が起きているのか、素早く判断し、効果的なパフォーマンスの向上や改善につなげることができ

る。また、トレーニングの映像をほぼリアルタイムでチェックできる「映像・情報技術サポーター」を

自転車競技部は夕方のミーティングに活用しているという。「トレーニングの感覚を忘れないうちにチェックできることは価値のあるサポーター」と、自転車競技部の西山哲成監督（スポーツ・トレーニングセンター長）も目を細める。

「パフォーマンス分析サポーター」での取り組みはまさに「情報の目」として、選手・指導者をサポートしている。活用するアスリートはもちろんだが、測定・撮影や分析などのさまざまな機会や、サポートを志す学生も能力を発揮する場となるだろう。



平成28(2016)年度事業計画の基本方針について

—日本体育大学—

少子高齢化が進行するわが国では18歳人口の減少傾向に歯止めがかけられない状況下であり、2018年からはさらにその傾向が進展して2020年からは120万人を割るなど高等教育への進学者が減少することから、各大学は国立、私立を問わず、多様な入試改革を行うための方策を講じて学生確保に鎗を削っている。これに加えて体育及びスポーツの分野では、有名私立大学をはじめとした諸大学で関連分野の学部及び学科の新増設が全国的規模で相継ぎ、この分野の専門大学として最も長い歴史と伝統を有する本学においても学生確保の問題は看過できない状況にある。2020年に東京でオリンピックとパラリンピックが開催されるので、この分野は開催までの間、追い風を甘受し得ることになるが、2020年後の18才人口の激減と社会的ニーズの対応を見誤れば強い向かい風を受けることになる。したがって全国的に指導者を輩出してきた本学もこのような状況を危機として受け止めねばならない。優秀な学生を全国から確保するための入試の在り方と改善を引き続き図るとともに、新たに体育学部を改組して国際社会で活躍できる人材の育成と、高齢者や障害者にスポーツを届けて健康を提供できる人材の育成を目指して新たな受験生の発掘をはかる必要がある。また、2013年4月開設の児童スポーツ教育学部2014年4月開設の保健医療学部においても優秀な学生を確保するための入試の在り方と改善を引き続き図ることも喫緊の課題となっている。そのため、各学部の魅力を醸成する必要がある。2017年4月に児童スポーツ教育学部を基盤とする大学院研究科を開設、2018年4月に保健医療学部を基盤とする大学院研究科を開設、既設の体育科学研究所のスポーツコーチング学専攻を増設するための準備に着手する。

一方、本学は本年に創立125周年を迎える。この節目の年に合わせて短期的、中期的に事業を計画し、これを推進していかなければならない。

そこで、このような本学を取り巻く社会環境の変化に対応して本学が将来にわたって持続的に発展を遂げるために、建学の精神を体現しつつ、理事会が推奨する基本方針(「選手強化」「国際化」「ワンファミリー化」)を踏まえて、効果的な事業計画の具体的な基本方針を以下において策定するものである。

1 適切な学生数の確保

- (1) 入試方法の多様化を図り、安定した学生の数とアドミッションポリシーに適うより優秀な学生を確保する。
- (2) 全国的な規模での学生の確保を図る。
- (3) 運動能力はもとより、学力の高い学生を確保する。
- (4) 首都圏以外の地域からの受験者増加推進施策を検討する。
- (5) 海外在留邦人及び外国人の受験機会を拡大させる。
- (6) 地域ブロックAO入試における地方入試会場実施を検討する。
- (7) 平成29年度入学試験からの東京・世田谷キャンパス試験会場帰を実施するための計画を推進する。
- (8) アドミッション・ポリシーの修正・見直しを行う。
- (9) サテライト入試会場への受験生の拡充を図る。
- (10) センター試験の導入と、それに伴う、一般入試(前期)の見直しを図る。
- (11) 編入学受け入れの充実を図る。

2 教学改革の推進

- (2) 転・退学生の防止を図る。
 - ① 現状を分析して防止策を策定する。
- (1) 「学士力」と「就業力」の向上を意図した2013年カリキュラム(平成25年度体育学部新入生から適用の円滑な運用を図る。)
- (2) 就職率向上を図る。
 - ① 企業就職率の向上を図る。
 - ② 教員志望者のレベルアップのための各種スキルアップ講座を実施する。
 - ③ 児童スポーツ教育学部向け小学校教員受験対策プログラムを開発し、実施に移す。
 - ④ 保健医療学部向け国家試験対策を早期に策定し、実施に移す。
 - ⑤ パイロット養成 F1ドライバールーティン育成プログラムを支援する。
- (3) 日体力育成プログラムの構築する。
 - ① 日体力育成プログラムの構築する。
 - ② T A制度を積極的に活用する。
 - ③ 日体力アップセミナーを全学で実施する。
- (4) 国際交流センターと協力して学生の英会話力を向上させる。
- (5) F D及びSDに積極的に取り組むなど教育内容及び教育環境の充実を図る。
 - ① 新学務システムを活用し授業評価結果の検証を実施する。
 - ② 教員の資質向上のために、大学の内外の研修会に職員を参加させるなど、SDの一層の充実を推進する。
 - ③ 教員の資質向上のための具体的活動として、授業の公開制度や授業の参観制度を創設する。
 - ④ 教員の海外研修を推進する。
- (6) 学生サポート環境の充実を図る。
 - ① 学生の学修時間や行動を組織的に把握するためのツールとして、GAKUUNoteを導入する。
 - ② 窓口対応の学生行動プロファイル登録システムの構築を行う。データ収集したものをGAKUUNoteに反映し分析・対応に活用する。
 - ③ 学生カウンセラーの人選確保を引き続き行う。
 - ④ 交通ルール(自転車、バイク)、薬物乱用防止の啓発活動を実施する。
 - ⑤ 学生支援センターから様々な情報を発信し、学生生活がより円滑に送れるよう支援する。
 - ⑥ 防犯対策を強化する。
 - ⑦ 機能障害のある学生の受け入れ体制の整備を行なう。
 - ⑧ 学修行動や学生行動を把握するプロファイルの充実を図る。
 - ⑨ ICT教育環境の整備のため、導入済みである学修支援システムの活用推進を図る。
- (7) 図書館教育の充実を図る。
 - ① 図書館オリエンテーションを充実させ、アカデミックライティングの講座を開講する。さらに「使われる学習空間」となるよう、一層のライティングサポート等を展開する。
 - ② 学術情報基盤整備(電子図書館化)を推進する。
- (8) 学生生活指導の充実を図る。

3 研究体制の強化

- (9) 教員養成に向けて、新たな体制を作る。
 - ① 教職支援センターを立ち上げる。
 - (10) 学生の学習・生活のより一層の支援と環境の整備を図る。
 - ① 学生食堂を中心とした食育を推進する。
 - ② インターンシップを促進させる。
 - ③ 健康管理センター及び健康管理体制(健康診断・健康診断事後措置・健康及び保健相談等)の更なる充実を図ると同時に、各種啓発活動(AEDの使用を含む応急手当・熱中症や感染症の注意喚起等)を推進する。
 - ④ 女性アスリートや女子学生が相談しやすい婦人科・総合内科を専門とする女性の健康相談医による、女性の健康サポート強化する。
 - ⑤ 蘇生法とAEDの操作法に関する講習会に学生が参加できる機会を増やす。
 - ⑥ 「スポーツクリニック」を開設し、学生の指導者としての参加を促す。
 - ⑦ 自動証明書発行機のシステム再構築を行う。
 - ⑧ 女子学生の満足度を高めることを意識した環境整備を進める。
 - (11) 体育学部の改組を推進する。
 - ① 必要な教員を補充する。
 - ② 体育学部の教育と研究の質を向上させるため改組の可能性を検討する。
 - (12) 児童スポーツ教育学部の円滑な運営を図る。
 - (13) 保健医療学部の円滑な運営を図る。
 - (14) スポーツ文化学部の開設を図り、その円滑な運営を図る。(平成29年度開設予定)
 - (15) 自己点検・評価を実施する。
 - (16) 校友会を組織し、積極的な活動を推進する。
 - (17) オンラインスクラフ運営の基盤を作る。
 - (18) 特別支援学校教諭免許取得について検討する。
 - (19) 児童スポーツ教育学部並びに保健医療学部の大学院設置に向けて準備を進める。
 - (20) 大学院体育科学研究所にスポーツコーチング学専攻を増設するための準備を進める。
- (1) 研究室体制の再編成を図り、機能化を推進する。
 - ① 研究室体制の機能化を図り学際研究を推進する。
 - (2) 研究施設・設備の二元管理を推進する。(専任教員による教育の充実)
 - ① 効果的な研究活動を推進するために、円滑な管理・運営を実施する。
 - (3) 研究組織の連携を強化する。
 - ① 総合スポーツ科学研究センターを軸に研究機関相互(大学院



体育研究所（スポーツ・トレーニングセンター）の連携を強化する。

② オリンピックスポーツ文化研究所における研究を推進するとともに、オリンピック・パラリンピックの啓発活動を行う。

③ 2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた選手のサポート体制を強化する。

④ 研究活動を推進する。

① 専任教員に対して科学研究費助成事業（科研費）等の応募を義務づけるとともに、大規模予算の獲得に向けた研究プロジェクトを立ち上げ研究費の獲得を図る。（外部資金獲得に向けた体制強化）

② 研究助成に基づく研究の公表を義務付け。

③ 研究施設・機器備品の二元管理体制の構築

④ 学術研究補助費（学内）の運用方法の改善を図る。

⑤ 研究のための倫理教育プログラムを実行する。

⑤ 出版物の質向上を図る。

① 「日本体育大学紀要」「日本体育大学スポーツ科学研究」についてこれまで以上の論文投稿を促し、質の向上を推進する。

② 体育研究所及びスポーツ・トレーニングセンターで発行していたジャーナルの発行内容・形態を変更する。

③ 新設の「オリンピックスポーツ文化研究」を発行する。

⑥ 大学院学生の研究指導の仕組みを改善する。特に研究論文の質を向上させるための必要支援体制を整える。

① 学生の論文発表の機会を増やすため、学内学会等の立ち上げについて検討する。

② 論文作成にかかわるチェック体制を整えるためのソフトを導入する。

⑦ 大学院の充実を図る。

① 実践教育研究科（前期・後期）を設置する。

② 保健医療学部大学院研究科を設置する準備を開始する。

③ スーパーコーチャー・アカデミー（文科省委託事業の円滑な運用を図る）。

④ 大学院事務室を設置する。

⑤ 体育科学研究科にスポーツコーチング専攻を開設する。

⑧ 学生の情操教育のためにキャンパス全体の博物館化を推進する。

① 博物館資料の収集と展示を推進する。

② 資料の整理と保管のための環境を整備する。

4 国際交流の推進

① 国際交流の推進を図る。

① JICAと連携して卒業生を青年海外協力隊員として開発途上国に派遣する。

② トップアスリート（オリンピック候補選手等）、青年海外協力隊員への希望者、オリンピックボランティア希望者、海外留学生のための語学教育（主として英会話）の充実を図る。

③ 本学独自のスポーツ交流を推進する。（朝鮮体育大学との交流を続けるとともに開発途上国へ学生及び卒業生を派遣する。）

④ 海外の大学と交流協定締結校を増やす。

⑤ 125周年記念式典に交流協定校の代表を招待する。

⑥ 国際シンポジウムを開催する。

5 スポーツ競技力の強化

① 理事会との連携の下で、大学の政策として重点種目及び強化選手に関する新たな基本方針を策定する。

② 奨学生制度の効果的な運用を図る。

③ スポーツ局の運用の改善を図る。

④ 指導者（専門職のコーチ、トレーナー）の適切な配置を行なう。

⑤ 強化費の合理的な配分を行うために選定基準等重点強化種目及び重点強化選手に関する基本方針を策定する。

⑥ 運営組織を改善する。

⑦ 2020年の東京オリンピック・パラリンピックに積極的に協力する。

⑧ 本学出身のオリンピックを70人以上出場させる。

⑨ 上記選手のマルチサポート体制の充実を図る。

⑩ パラリンピアン育成を図る。

⑪ パラリンピックの指導者を養成する。

⑫ 競技力向上に資するための科学的な研究を推進する。

⑬ 平成26年度に拡大した人的支援体制を整える。他の附置機関、保健医療学部との連携により機能する強化体制の確立を目指す。

⑭ マルチサポート体制（日体大アスリートサポートシステム（NASS））の強化を図る。

⑮ スポーツ・トレーニングセンターの活動をより充実させる。

6 計画的な施設整備

① 再開発により完成した建物の維持管理を迅速かつ的確に実施する。

② 建物の維持管理に関する経費節減（省エネ・エコ対策を含む）を推進する。

③ 経年劣化に伴う設備の修繕等管理を適切に進める。

④ 屋内・屋外の運動施設の修繕・既存施設の整備を図る。

⑤ 新時代の学修環境等の整備を進める。

⑥ IT資源の延長活用を推進する。

⑦ ビーチバレーコートの新設する。

⑧ 女子志願者増加・女子学生の満足度を高めることを意識した施設整備を進める。

7 社会・貢献活動の推進

① 社会貢献推進機構の事業のより一層の充実を図る。

② 公開講座を積極的に開催する。

③ スポーツ教室を開設し地域との連携を推進する。

④ 全国のスポーツクラブとの連携を検討

⑤ 学生のスポーツ指導者の派遣依頼に積極的に対応する。

⑥ 教育研究情報の公開を促進する。

⑦ 学校法人日本体育大学が推進する地方自治体との体育・スポーツ・健康等に関する事業に積極的に協力する。

⑧ 保護者会と連携し、災害ボランティア活動を推進する。

8 戦略的広報の展開

① ホームページの充実と有効活用を図る。

② 学報「NITTAI DAIR」およびサブパンフレットを充実させる。

③ 学生募集に関する広報活動を推進する。

④ メディアを活用した広報活動の促進とマスコミ対応に努める。

⑤ 学内広報活動をし、情報の共有化を徹底する。

⑥ 本学学生の就職支援に関する広報活動を側面的に支援する。

⑦ 受験生、保護者、同窓生等に対して積極的な情報発信に努める。

⑧ 児童スポーツ教育学部・保健医療学部の情報を発信する。

⑨ 学生募集・広報マーケティングに繋げる施策を展開する。

⑩ ブランディングの普及促進を図る。

⑪ 創立125周年に向けて積極的な広報活動を展開する。

⑫ 女子志願者増加を意識した広報活動を展開する。

9 健全財政への積極的取組

① 平成27年度に引き続き、経費節約に努め、積立金を確保していく。

② 児童スポーツ教育学部の学納金を体育学部に合わせて値上げする。

③ 新学部の学納金を体育学部に合わせて決定する。

④ 新大学院研究科の学納金を体育科学研究科に合わせて決定する。

⑤ 大学資産の有効活用を推進する。

10 高大連携の推進

① 併設校との施設の共有化を促進する。

② 併設校へ教職員・学生を派遣する。

③ 併設校の学生の受け入れを促進するための方策を講ずる。

11 教職員の人事計画の策定

① 専任教員を確保する。新学部及び新研究科の開設に係る適切な採用人事を行う。

② 事務職員を確保する。

12 寄付金募集の推進

① 創立125周年記念事業の充実を図ることを目的として、学校法人と協力し、積極的に寄付金募集を行う。

13 その他

① 学校法人と協力して創立125周年記念式典を挙げる。

② 『写真でみる創立125周年史』（仮題）を刊行する。

③ 『美の回廊』博物館写真誌を刊行する。

団体名	大会成績
アーチェリー部	第28回全日本学生フィールドアーチェリー選手権大会 女子優勝(小城碧)
	第54回全日本学生アーチェリー個人選手権大会 コンバウンド部門女子優勝(谷國彩夏)
アクアスポーツ研究会	第22回全日本スポーツダイビング室内選手権 女子200M潜水 優勝(岡野彩花)
カヌー部	第51回全日本学生カヌースプリント選手権大会 K-1 500m×4(リレー)、C-1 500m×4(リレー) 優勝
自転車競技部	文部科学大臣杯 第71回 全日本大学対抗選手権 自転車競技大会 ポイントレース 優勝(小林泰正)
	2015 全日本自転車競技選手権大会オムニウム 優勝(小林泰正)
少林寺拳法部	第49回少林寺拳法全日本学生大会 女子初段の部、男女初段の部、単独段外の部、女子団体演武の部 優勝
	2015年 少林寺拳法全国大会 in KYOTO 大学女子有段、大学生団体の部 優勝
柔道部	平成27年度全日本学生柔道体重別選手権大会 個人 60kg級 優勝(青木大)
	アジアジュニア柔道選手権大会 優勝 55kg級(黒山太智) 73kg級(岡田大希)
水泳部	<競泳ブロック>第91回日本学生選手権大会水泳競技大会競泳競技 優勝 団体:女子総合 個人:200M、400M自由形 優勝(五十嵐千尋)、400M個人メドレー 優勝(大塚美優)
	<水球ブロック>第91回日本学生選手権水泳競技大会 水球競技 男子 優勝
	<水球ブロック>第91回日本選手権水泳競技大会 水球競技 男子 優勝
	<飛込ブロック>第91回日本学生選手権水泳競技大会 飛び込み競技 団体:男子優勝 個人:3M飛板飛込 優勝(千歩純一)
スカッシュ同好会	第41回全日本学生スカッシュ選手権大会 団体戦 優勝 女子
スケート部	第3回 日本学生女子アイスホッケー大会 優勝
体操競技部	第69回全日本体操競技団体選手権大会 男子・女子 優勝
セパタクロ同好会	第1回全日本セパタクロ団体対抗戦 女子の部 優勝
	JOCジュニアオリンピックカップ 第14回全日本セパタクロジュニア選手権大会 男子の部 優勝(荒谷大介、大川広宣、清呂木皓基) 女子の部 優勝(戸上佳代、上本瑞季、倉持瑛里香)
	第20回全日本学生セパタクロオープン選手権大会 男子の部 優勝(内藤利貴、長谷川奨、太田駿一) 女子の部 優勝(小林菜音、田中結里、清水舞夏)
	第23回全日本学生セパタクロ選手権大会 男子の部 優勝(中嶋涼、大川広宣、太田駿一) 女子の部 優勝(杉原由、中野遥奈、高地恵)
タッチラグビーサークル	第5回全日本選手権大会
	男子 SUNBODY TOUCH A 優勝
	女子 SUNBODY TOUCH A 優勝
ダブルダッチサークル	Double Dutch 2015 Holiday Classic 優勝
	Double Dutch Delight Japan 2015 優勝
	World Jump Rope 優勝
チアリーダー部	第8回チアリーディング世界選手権大会 女子部門 優勝(網屋茜、山本祐愛)
トライアスロン部	2015 日本学生トライアスロン選手権 女子団体 優勝
	2015 トライアスロン・チームタイムトライアル選手権 女子チームTT 優勝
トランポリン競技部	第50回 全日本学生トランポリン競技選手権大会 Aクラス:女子団体 優勝(佐竹玲奈、土井畑知里、富田ひとみ、服部佳奈) 個人 女子 優勝(佐竹玲奈) Bクラス:個人男子 優勝(笠井明日翔)
	第52回全日本トランポリン競技選手権大会 シンクロ女子 優勝(佐竹玲奈、土井畑知里)
	ワールドカップ ボルトガル大会 シンクロ女子 3位(佐竹玲奈、土井畑知里)
	ローレカップ 個人男子・団体男子 2位(藤田隆之介)
	第24回 世界年齢別トランポリン競技選手権大会 シンクロ 17・18歳男子 3位(藤原壮輝)
	第31回 世界トランポリン競技選手権大会 シンクロ女子 4位(佐竹玲奈、土井畑知里)
軟式野球部女子	第29回 全日本大学女子野球選手権大会 優勝
	第21回 女子軟式野球ジャパンカップ 優勝
ハンドボール部男子	平成27年度全日本学生ハンドボール選手権大会 優勝
フィンスイミングクラブ	第24回 フィンスイミング短水路日本選手権大会 総合優勝
ボート部	第56回 全日本新人選手権大会 W1x 優勝(高橋かほ)
ライフセービング部	第28回 全日本プール選手権大会 総合優勝
	第30回 学生ライフセービング選手権大会 男子優勝
	第41回 全日本ライフセービング選手権大会 総合2位
ラクロス部男子	第7回 全日本ラクロス大学選手権大会 優勝
陸上競技部	2015 IOC陸上競技世界選手権大会(ドーバー大会) 100m 6位(辻沙絵)
	天皇賜盃第84回・秩父宮妃杯第67回 日本学生陸上競技選手権大会 男子棒高跳 優勝(山本智貴)
ラグビー部女子	Japan Women's Sevens 2015 優勝
	第2回全国女子ラグビーフットボール選手権大会 優勝
レスリング部	2015年 天皇杯全日本選手権 フリースタイル57kg級 優勝(樋口黎) グレコローマン59kg級 優勝(太田忍) 75kg級 優勝(屋比久翔平)
	2015年 全日本大学選手権 86kg級 優勝(松坂誠應)
	2015年 全日本大学グレコローマン選手権 59kg級 優勝(太田忍) 71kg級 優勝(高橋昭五) 80kg級 優勝(屋比久翔平) 98kg級 優勝(奈良勇太)
	2015年 全日本学生選手権 ◎フリースタイル86kg級 優勝(松坂誠應)
	◎グレコローマンスタイル 59kg級 優勝(文田健一郎) 66kg級 優勝(下山田培) 71kg級 優勝(澤田夢有人) 80kg級 優勝(屋比久翔平)

■平成28年度 日本体育大学
役職者一覧

学 長	谷 釜 了 正
副学長（企画・管理・運営担当）	具 志 堅 幸 司
副学長（教学・学生生活担当）	松井幸嗣（兼）
大学改革推進室長	西 本 幸 嗣
インスティテューショナル・リサーチ室長	具志堅幸司（兼）

大学院研究科長	石 井 隆 憲
体 育 学 部	
学 部 長	松 井 幸 嗣
体 育 学 科 長	荻 浩 三
健 康 学 科 長	野 井 真 吾
武 道 学 科 長	齋 藤 一 雄
社会体育学科長	依 田 充 代

児 童 ス ポ ー ツ 教 育 学 部	
学 部 長	久 保 健
児童スポーツ教育学科長	岡 本 美 和 子
児童スポーツ教育コース主任	角 屋 重 樹
幼児教育保育コース主任	岡本美和子(兼)

保 健 医 療 学 部	
学 部 長	平 沼 憲 治
整復医療学科長	伊 藤 讓
救急医療学科長	朝 日 茂 樹

教養・教職科長	藤 田 主 一
---------	---------

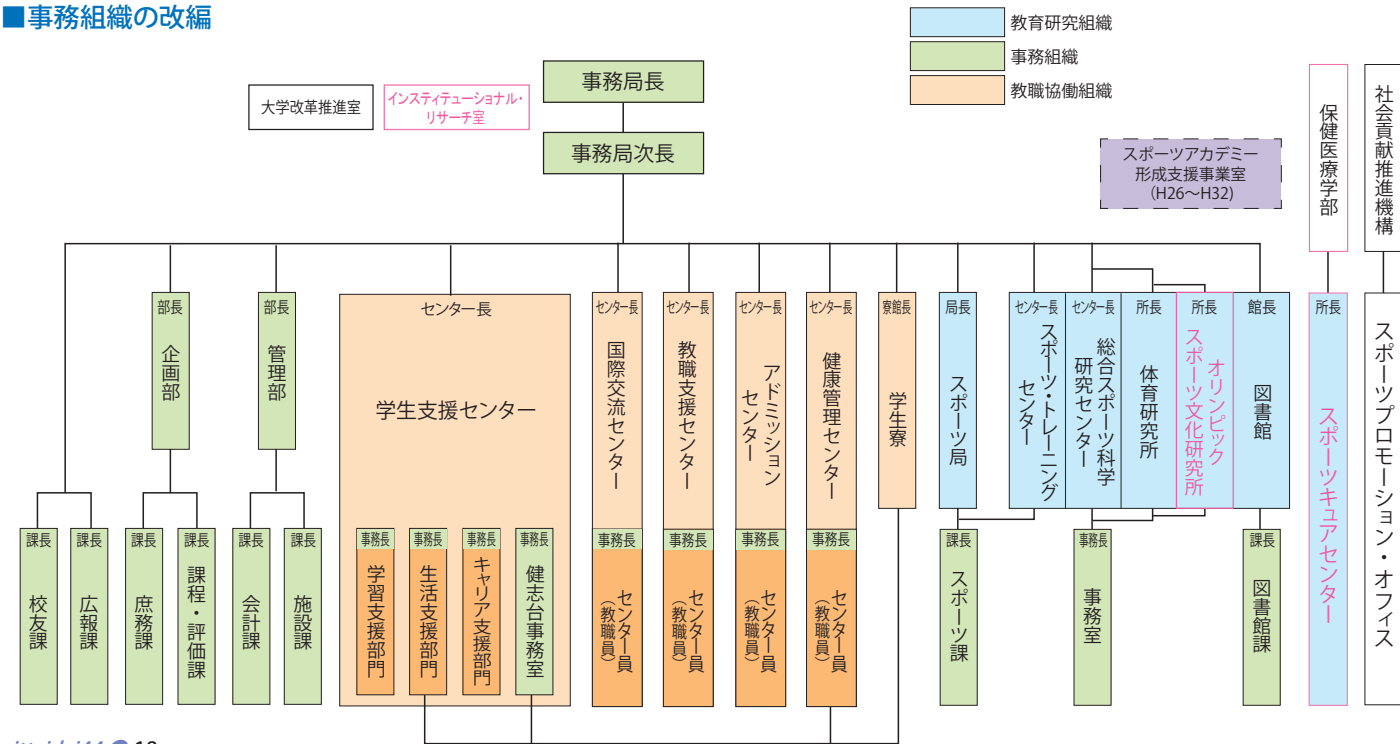
【附置機関長】

図書館長	木 村 直 人	体育研究所長	中里浩一（兼）
副館長	谷 口 豊	オリンピックスポーツ文化研究所長	関 根 正 美
健康管理センター長	入 江 一 憲	スポーツ・トレーニングセンター長	西 山 哲 成
学生支援センター長	鈴 川 一 宏	国際交流センター長	荒 木 達 雄
副センター長(学習・キャリア)	三 宅 良 輔	副センター長	笠 井 里 津 子
副センター長(生活)	小 林 正 利	寮監長	水 野 増 彦
アドミッションセンター長	横 山 順 一	スポーツキュアセンター院長 （保健医療学部附属接骨院）	伊 藤 讓（兼）
副センター長	忠 政 明 彦	教職支援センター長	後 藤 彰
総合スポーツ科学研究センター長	中 里 浩 一	副センター長	近 藤 智 靖
		スポーツ局長	八 木 沢 誠

【日本体育大学社会貢献推進機構】

機構長	学 長 （ 併 ）			
副機構長	副 学 長 （ 併 ） （企画・管理・運営担当）		〔スポーツプロモーション・オフィス〕 オフィスディレクター	白 旗 和 也
ベースマネージャー	後 藤 彰（併）		アシスタントオフィスディレクター	大 高 秀 二（併）
ベースマネージャー	波多腰克晃（併）		アシスタントオフィスディレクター	増岡啓彰（併）

■事務組織の改編



■平成28年度 学年暦

月	日	行 事
平成28 2016 4	2(土)～5(火)	新入生オリエンテーション(健康診断他)
	3(日)	入学式
	6(水)	前学期授業開始
	29(金)	昭和の日(通常授業)
5	上旬～	養護実習(健康学科ヘルスプロモーション領域4年)
	2(月)	7/18の振替休日
	6(金)	4/29の振替休日
	下旬～	教育実習(保健体育)(体育学部4年)
6	5月下旬～6月上旬	教育実習Ⅱ(幼稚園)(幼児教育保育コース)
	上旬～	ウォーターセーフティー理論・実習(社会体育学科3年)
	上旬～	教育実習Ⅱ(小学校)(児童スポーツ教育学部4年)
	下旬～	相談援助実習(健康学科ソーシャルサポート領域4年)24日間以上
7	9(土)～17(日)	夏季実習期間
	9(土)～12(火)	ゴルフ実習(体育学科4年)
	9(土)～16(土)	野外活動実習(保健医療学部1年)
	9(土)～16(土)	キャンプ実習(体育学部2年)
	10(日)～16(土)	海浜実習(体育学部2年)
	10(日)～16(土)	野外活動実習(児童スポーツ教育学部1年)
	13(水)～16(土)	ゴルフ理論・実習(社会体育学科3年)
	18(月)	海の日(通常授業)
	下旬～2月末	介護等体験(体育学部2年・児童スポーツ教育学部2年)
		社会福祉施設[5日間]特別支援学校[2日間]
8	上旬～9月上旬	看護臨床実習(健康学科ヘルスプロモーション領域3年)[4週間以上]
	2(火)	前学期授業終了
	3(水)～9(火)	前学期補講、追・再試験期間(体育・児童スポーツ教育学部)
	4(木)～9(火)	定期試験期間(保健医療学部)
	29(月)～9/1(木)	補講期間(保健医療学部)
	10(水)～9/25(日)	夏季休業
	31(水)～9/9(金)	キャンプ理論・実習(社会体育学科3年)
	上旬～	社会教育実習(社会体育学科スポーツマネジメント領域3年)[9月下旬まで]
	上旬～	保育実習Ⅰ(幼児教育保育コース3年) 保育実習Ⅱ・Ⅲ(幼児教育保育コース4年)
9	5(月)～9(金)	追・再試験期間(保健医療学部)
	7(水)～17(土)	マリンスポーツ理論・実習(社会体育学科2年)
	20(火)	開学記念日
	下旬～	教育実習Ⅰ(児童スポーツ教育学部3年)
	26(月)	後学期授業開始
11	26(月)～10/7(金)	ホームルーム期間
	3(木)～6(日)	日体フェスティバル期間(準備日含む) ※この期間は通常授業なし
	11月中旬～11月下旬	教育実習Ⅰ(幼稚園)(幼児教育保育コース)
	23(金)	天皇誕生日(通常授業)、12月授業終了
	24(土)～1/10(火)	冬季休業
12	12月・1月の土日(予定)	伝統芸能実習Ⅰ(武道学科伝統芸能領域2年)
	12月・1月の土日(予定)	伝統芸能実習Ⅱ(武道学科伝統芸能領域3年) 比較舞踊学実習(武道学科伝統芸能領域3年)
	下旬	スキー理論・実習(社会体育学科3年)
平成29 2017 1	11(水)	1月授業開始
2	30(月)	後学期授業終了
	6(月)～10(金)	後学期補講、追・再試験期間(体育・児童スポーツ教育学部)
	6(月)～10(金)	定期試験期間(保健医療学部)
	11(土)～21(火)	冬季実習期間(体育学部)
	11(土)～21(火)	スケート実習(体育学部3年)
	12(日)～21(火)	スキー実習(体育学部3年)
	13(月)～15(水)	補講期間(保健医療学部)
	16(木)～22(水)	追・再試験期間(保健医療学部)
	22(水)～25(土)	スケート理論・実習(社会体育学科3年)
	27(月)～3/3(金)	ホームルーム期間
3	中旬～下旬	伝統文化交流実習(武道学科2年)
	10(金)	卒業式・学位記授与式
	11(土)～31(金)	春季休業

注) 実習等の期間については、変更することがあります。

■平成27年度退職者紹介

①着任、②主な役職等、③主な学友会活動、④主な学会・活動等(抜粋)

谷釜 了正 (たにがま りょうしょう)

①昭和51年／②学長、体育学部長、図書館長、学長室長、学校法人日本体育大学理事・評議員／③軟式野球部部長／④日本体育学会幹事・評議員、スポーツ人類学専門分科会世話人

袴田 大蔵 (はかまだ だいぞう)

①昭和46年／②副学長、体育学部長、武道学科長、学生支援センター長、学校法人日本体育大学理事・評議員／③弓道会顧問、空手道部部長、剣道部部長／④日本体育学会

伊藤 直樹 (いとう なおき)

①昭和46年／②副学長、体育学部長、学生支援センター長、寮監長、学生部長／③トランポリン部部長、学友会副会長(総務担当)、基礎スキー研究会顧問／④日本体育学会

阿部 茂明 (あべ しげあき)

①昭和46年／②副学長、女子短期大学部長、スポーツ局長、アドミッションセンター長、教務部長、学校法人日本体育大学理事・評議員／③カヌー部部長／④日本体育学会

楠本 恭久 (くすもと やすひさ)

①平成2年／②体育専攻科長、教養・教職科長、体育研究所長、総合スポーツ科学研究センター長、図書館長／③少林寺拳法部部長／④日本スポーツ心理学会、日本心理学会

細川 節子 (ほそかわ せつこ)

①昭和48年／③音楽部部長／④日本音楽教育学会、日本保育学会、全国大学音楽教育学会、演奏活動として、ピアノソロ、ピアノデュオ、ピアノトリオなどの多数の演奏会に出演。

清田 寛 (きよた ひろし)

①昭和48年／②副学長、体育学部長、短期大学部長、キャリア支援センター長、学校法人日本体育大学理事・評議員／③ゴルフ部部長、アーチェリー部部長／④日本体育学会

櫻井 忠義 (さくらい ただよし)

①平成3年／②健康学科長、健康管理センター所長／③ボート部部長、硬式野球部部長／④日本体力医学会、日本職業病・災害医学会、日本衛生学会、日本産業衛生学会

村本 和世 (むらもと かずよ)

①昭和47年／②女子短期大学体育科長／③家政部部長／④日本体育学会、日本体力医学会、AAAS(アメリカ科学会)、東京都港区港南いきいきプラザ指定管理者選考委員

武藤 芳照 (むとう よしてる)

①平成25年／②日体大総合研究所所長／④日本転倒予防学会理事長、日本整形外科スポーツ医学会代議員・監事、日本整形外科学会、日本臨床スポーツ医学会評議員

島田 功 (しまだ いさお)

①平成25年／④日本数学教育学会、同研究部教育課程委員、全国数学教育学会、日本教科教育学会、日本科学教育学会、日本数学教育心理学会、国際数学教育心理学会(PME)

細谷 治朗 (ほそたに じろう)

①昭和47年／③ウェイトリフティング部女子監督／④日本体育学会、日本体力医学会、社団法人日本ウエイト・リフティング協会強化副委員、同選手協会員、同常務理事

学校法人日本体育大学は、「体育」を通じて社会に貢献いたします。

●ご支援をお考えの皆様へ

当法人および設置校へご支援いただいた寄付金は、125周年記念事業として、スポーツ選手強化・指導者育成や国際交流によるグローバルリーダー育成、教育研究環境の充実・発展や設置校在学生への奨学金などを目的とし、その成果を通じ、広く社会に貢献、還元いたします。皆様からのご支援、ご協力が大きな支えとなりますので、是非ご賛同いただき、多くの方々のご寄付をお願い申し上げます。

●寄付金お申込み方法 (<http://www.gaku-nittai.ac.jp/125/donation.html>)

寄付金の詳細は、上記の本校の特設 Web サイトをご覧ください。※当法人に対するご寄付は、税制上の優遇措置を受けることができます。



【寄付金等お問い合わせ先】学校法人日本体育大学 法人事務局 総務部 経理課

〒158-0081 東京都世田谷区深沢 7-1-1 TEL : 03-3704-5201 FAX : 03-3704-3336 E-mail:kifu@gaku-nittai.ac.jp